

## [講演要旨] 1703年元禄関東地震による被災地域の生活環境の変化

首都大学東京大学院 都市環境科学研究科 村岸 純

Change of the living conditions occurred in the damaged area of the 1703 Genroku Kanto earthquake.

Jun Muragishi

### § 1. はじめに

元禄関東地震(以下、元禄地震と略す)は、元禄十六年十一月二十三日丑の刻(1703年12月31日午前2時頃)に相模トラフ沿いで発生した巨大地震である[宇佐美(2003)]。

筆者はこれまで元禄地震に伴う海岸線の変化やその影響に関して研究を行ってきた[村岸(2009)など]。その後、研究対象地域を拡大し文献調査を継続してきた。地震の被害だけではなく被災地域の環境の変化という視点で研究した成果を報告する。

### § 2. 研究成果

#### 2.1 房総半島南部地域

承応三年(1655年)の「地曳網場舟付之儀に付相浜村願書」(『千葉県史料近世編安房国下』)によると、元禄地震以前には巴川が川湊として繁昌していたことが読み取れる。しかしその後発生した元禄地震で川湊が隆起して使用できなくなり、漁業を廃業しなければならなくなったことが延享四年(1747年)の大石村に関する文書に「四拾五年以前津波にて干潟に相成川湊無之浪高舟通行難成漁獵相止申候」とあることからわかった。

次に、江戸前期から漁業で栄えていた横渚村の前原では、元禄津波で千軒余りの家が残らず押し流され、1300人余りの死者が出たといわれている(『鴨川市史 通史編』)。

前原町では17世紀の前半頃から開発が進み、17世紀後半頃には家数600軒、江戸への廻船30隻、漁船150隻を所持していた(『新訂鴨川町誌』)。津波後、「前原町差出明細帳之控」(『鴨川市史 史料編1』)が作成された享保十七年(1732年)の戸数415軒、人口1862人とその復興の様子を記している。地引網等による漁労や干鰯の製造も盛んで、漁業・商業の町としての繁盛ぶりが記載されている。

しかし、前原町は元禄期以前の繁盛を取り戻せなかったようである。久根崎(1979)は、港が使用不可能になったため、近村の天津村・浜荻村へ鰯漁の中心が取られ、文化年中までには250軒に減少し商いも成り立たずに次第に衰微していったと報告しており漁民の移動を指摘している。地震や津波の直接的な被害からは復興したが、漁業が振るわず他の漁村へ繁栄が移ってしまった事例といえる。

#### 2.2 九十九里地域

一宮町本郷の被災状況は、『一宮町史』所収史料によると、津波の流失家屋166軒が記されている。津波による田の砂押が34町4反4畝14歩、畑の砂押が13町8反18歩、水腐れが21町3反3畝歩であった。東浪見村の早い地域では5年で元の水田に立ち直っているが、下谷耕地では15年もかかっている。また新笈村においては、田方7町2反25歩の内1町8反7畝11歩が本田砂埋亡所となり、畑方5町7反2畝13歩が本畑砂埋亡所となっている。「是は中の夏秋百姓男罷出砂さらへ普請仕候」という状態であった。

宝永二年酉(1705)二月の文書には、「去る末の十一月廿二

日之夜大地震津浪にて亡所仕候、本田十七町三反二畝二十八歩は百姓共自力にて普請仕候得共、残分自力に難相叶御座候に付時々以書付御代官様迄御訴訟申し上げ候」とあり、農地の復興には公儀の力を借らざるを得なかった。

このように一宮町では津波により砂が内陸部へも浸入し農作物ができなくなったことがわかる。回復するまでに長い時間が必要であることがうかがえる。

#### 2.3 三浦半島

三浦半島では、元禄地震と大正地震(1923年)では同じような地殻変動をともなったという意見が多いが、不詳な点もある。三浦市初声町入江の文政四年に書かれた下宮田村明細書上帳には「元禄十六年未大地震御津波ニ而浅成申候」と、入江地区が津波後、土地が浅くなったと記している。

『若宮神社誌』には「先年未之年大地震津波にて干潟ニ成り残り候所も大船入津成り難く成り候、風悪敷節又は汐掛など致し候ハバ右之通船掛けも罷成可くよし」と地震で干潟が浅くなり大きな船が湊に入港できなくなった。湊の機能は消滅したが、土地が隆起したために湊奥半分に入江新田が開発されることになったことがわかる(『新稿 三浦半島通史』)。

また、「正徳二年五月 波除け葭刈取り一件につき訴状および返答書」(『新横須賀市史 資料編近世1』)によると三浦郡八幡村で「八幡村入海湊之儀ハ(中略)然所拾ヶ年以前未ノ年大地震より以来右之場所干かたニ罷成候」と八幡村でも隆起した可能性が考えられる。

このように三浦半島では元禄地震による被害や影響は史料からは不明な点が残っているが、断片的に生活環境の変化があったことが伺える。

### § 3. おわりに

元禄地震によって土地が隆起し干潟ができた。そのためこれまで使っていた塩田が使えなくなったり、湊が使えなくなったりしている。津波により農地に砂が入ったために農業が停滞してしまうこともわかった。以前より行われてきた地震による元禄地震の被害像の復元に生活環境の変化という新たな知見を加えることができた。今後、地震による生活環境の変化という視点で、より広い地域での変化を検討していきたい。

#### 文献

- 千葉県史編纂審議会編集, 1956, 『千葉県史料』, 近世篇, 安房國, 下一宮町1964, 『一宮町史』  
半島史研究会編, 2005, 『新稿三浦半島通史』, 文芸社  
鴨川市史編さん委員会, 1996, 『鴨川市史』, 通史編, 鴨川市  
鴨川市史編さん室, 1994, 『新訂鴨川町誌』  
鴨川市史編さん委員会, 1991, 『鴨川市史』, 史料編1, 鴨川市  
久根崎周太郎, 1979, 漁民の移動, 『鴨川風土記』, 創刊号, 162-174  
村岸純, 2009, 元禄関東地震による房総南部の地震時および地震後の海岸環境変化, 『歴史地震』, 24, 129-143.  
宇佐美龍夫, 2003, 『最新版日本被害地震総覧』, 東京大学出版会  
若宮神社誌編集委員会, 1990, 『若宮神社誌』  
横須賀市編, 2007, 『新横須賀市史』, 資料編近世1